ZOCALO 2018 8▸9

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

阿部展也―あくなき越境者　9月15日（土）～11月4日

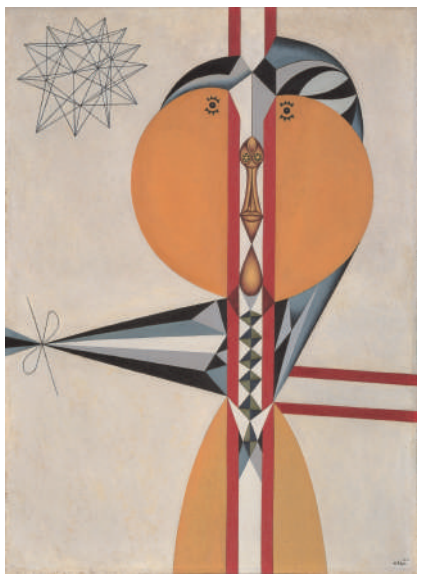
企画展「阿部展也―あくなき越境者」が9月15日からはじまります。この展覧会は、阿部展也の18年ぶりの回顧展で、今年3月より広島市現代美術館、新潟市美術館を巡回し、当館が最後の会場となります。では、阿部展也とは、どのような美術家だったのでしょうか。展覧会企画者である新潟市美術館の松沢寿重さんが、メッセージを寄せてくださいました。

阿部展也（のぶや）の名を初めて知る方もきっと多くいらっしゃることでしょう。新潟で生まれ、戦前から戦後を通じて日本の美術界に大きな足跡を残した人です。その生き様はまさに「あくなき越境者」。58歳でローマにて客死するまで世界中を駆け回り、活動の分野も、画家、写真家、評論家、中世墓石彫刻の研究家など多岐にわたるものでした。展覧会場では、「え？これ全部一人の人間の仕事？」と驚いていただけること、請け合いです。（新潟市美術館主幹／学芸員　松沢寿重）

1913年、現在の新潟県五泉市に生まれ、独学で画家を志した阿部展也。初めて美術界で注目を集めたのは、瀧口修造との共作による詩画集『妖精の距離』（1937年）の挿画でした。瀧口は、フランスのシュルレアリスム運動の紹介者として主導的な役割を果たした詩人・美術評論家で、当時まだ無名に近かった阿部の才能を見出し、共作によって阿部は輝かしいデビューを果たしたのです。翌年には、瀧口を中心とする前衛写真協会の結成に参加、雑誌『フォトタイムス』で作品を発表するなど、写真の分野でも活躍をはじめました。1939年にはフォトタイムス社特派員として大陸に渡り、旧満州や内蒙古を撮影します。

『妖精の距離』より《風の受胎》　1937年　新潟市美術館蔵

1941年からは陸軍に徴用されてフィリピンに出征。宣伝班（後の報道部）の写真班に配属されます。フィリピン時代の活動は不明な点も多いですが、フィリピンのローマ・カトリック教徒の宣撫を目的とした雑誌『みちしるべ』の表紙（図版は裏面）と挿画を手がけたことが、近年明らかになりました。また、現地で結婚して裕福な暮らしを送りますが、日本の形勢悪化によって収容所に抑留の身となり、1946年になって復員します。

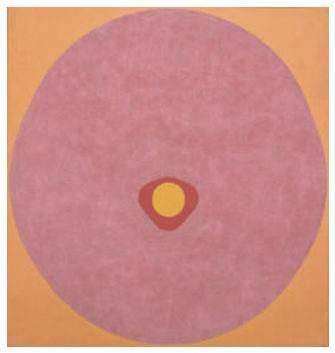


《花子》1949年　富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館蔵

戦後、阿部は新宿区下落合にアトリエを構え、1949年に再婚。この時期はさまざまな様式で多くの人間像を描いています（《花子》はこの頃の作品です）。また、フィリピンで身に着けた英語力を生かして海外にたびたび渡航し、1953年には日本美術家連盟の代表としてインドに滞在。1957年には現クロアチアのドゥブロヴニクで開催された国際造形芸術連盟の総会に出席し、その後、約1年間にわたって欧米を周遊します。

1959年頃から、阿部の作品は人間像を離れて抽象絵画へと移行し、エンコースティックという、顔料を混ぜた蜜蝋を加熱して画面に定着させる技法が用いられるようになりました。エンコースティック独特の豊かなマチエール（絵肌）が、この時期の絵画には見られます。1962年からは単身でイタリアに移住して、ルーチョ・フォンタナなど現地の美術家と交流。彼らの作品を日本に紹介する展覧会の準備にも奔走します。最晩年には、エンコースティックからアクリル絵具へと技法を変え、幾何学的な抽象絵画を制作。しかし、1971年に58歳で急死……。

阿部の生涯を辿ると、作風、活動分野、活動場所、いずれもそのあまりの「越境」ぶりに驚かされます。現在よりも海外渡航の機会や情報収集の手段がずっと少なかった時代に、並外れたバイタリティと貪欲さで世界を駆け回り、あらゆることを吸収し、つねに変貌し続けた阿部展也。それは異質なものや、未知なるものとの出会いを恐れず、より広い視野から世界をとらえることを求め続けた生涯だったともいえるでしょう。この展覧会では、主要作品や写真、雑誌、下絵等の資料、交流のあった国内外の美術家の作品を含めた約230点によって、阿部展也の全貌に迫ります。(T.Y.)



《R-12》1966年　千葉市美術館蔵

MOMASコレクション第2期「吉田克朗：プランと実践」《650ワットと60ワット》を制作ノートから読み解く　7月14日（土）～10月14日（日）

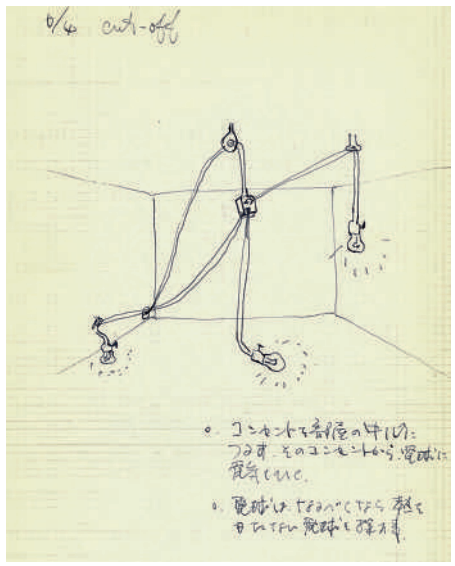
天井から自重で垂れ下がる電源ケーブル。ケーブルは宙吊りのコンセントで分岐し、片方は中空の60ワットの電球へ、もう一方は床に垂れとぐろを巻いて650ワットの電球へと繋がっています。電気を伝えるケーブル、それを分岐させるコンセント、光を灯す電球といった素材そのものの特性が、剥き出しの状態で提示されています。その一方、輝度の異なる電球は、周囲に光と影を投げかけ、鑑賞者を眩惑させる効果をもたらします。吉田克朗（1943－1999）によるこの作品《650ワットと60ワット》が1970年に発表された際、批評家ジョセフ・ラヴは、「粗末な素材を美しい結果へと見事に転化させた」と、作品の印象を語っています。当時のこういった傾向の作品、即ち物体の素性から知覚されるものを軸にする作品は、しばしばもの派として取り上げられ、吉田克朗もその中核作家として紹介されてきました。昨今、再評価が進むもの派ですが、歴史的位置付けにあたって、少々ややこしい問題を孕んでいます。

吉田克朗《650ワットと60ワット》1970年

まず、もの派はグループとして活動したわけではなく、事後的に検証された動向である点です。その傾向を示す作品が制作された期間は短く、一部の作家を除けばわずか数年に過ぎません。もうひとつの問題は、もの派は一過性の作風が多く、オリジナル作品がほとんど現存しない点です。そのため、もの派は、記録写真、様々な立場から発せられた言説、そして事後的な展覧会で作られる再制作作品という3つの事柄の関係の中で語られてきた経緯があります。従って、もの派の輪郭は相対的で、視点の置き方によっては異なって浮かび上がるとも言えるのです。

今回の吉田克朗の特集展示では、従来の議論を踏まえつつも、先入観にとらわれることなく、作品と作者の思考に直に向き合うことを狙いにしています。当館が所蔵する《650ワットと60ワット》は貴重なオリジナル作品であり、素材の選択や組合せなどにおいて、作者の当時の思考と感覚が凝縮されています。加えて、ほとんど存在が知られていなかった作者の制作ノートも、ご遺族の協力を得て特別出品します。1960年代末から綴られたこのノートには、様々な作品のプラン、制作や時代状況に対する考えなどが記されています。その中には、《650ワットと60ワット》と関連する、電源ケーブルや電球を用いたプランも含まれています。ノートに綴られたテキストは公表を前提とした草稿ではなく、自らの考えを整理する目的で自発的に記された言葉であるため、見ていくにつれ率直な心境が伝わってきます。物、オブジェ、状態、イメージ、視覚などのキーワードが少しずつ読み替えられ、作者の思考が行きつ戻りつしながら、漸進していく過程を知ることができるのです。また素材の選択においては、鑑賞の際に誤解や不必要な意味が生じないように、吟味を重ねていることも窺えます。

とりわけノートに登場する1969年から70年代初頭にかけての記述は濃厚です。ちょうど美術が根底から問い直されていた時期にあたり、吉田克朗が時代の空気を鋭敏に察知し、自ら選択すべく方向性を巡って思索を深めていた様子が分かります。こういった思索を経た末に生み出された作品のひとつが、《650ワットと60ワット》なのです。今回の展示は、希少なオリジナル作品と、虚飾のない想いが綴られた制作ノートを通して、吉田克朗が実践しようとしたものを再考する絶好の機会になるはずです。（I.H.）



吉田克朗の制作ノートより：「Cut-off」1969年6月4日

吉田克朗の制作ノートより：1970年2月13日

はみだしソカロ　はみだしソカロの投稿募集中です。ご意見などお寄せください。